

上智大学時代の長戸路信行氏

澤 護

1958年上智大学文学部外国語学科フランス語専攻に入学を許された直後の体育実技で、教官は1周約300メートルを50秒以内で走ってこいとのみまいった。当時の新生は2・3浪はざらで、およそ運動とは縁遠かったから、走り終わった後は全員グラウンドに倒れ込み若い教官に不満をぶつけたものだった。この時、腕を組み日陰になったグラウンドの石垣に背をもたれ、われわれの疾走をただ眺めていた黒っぽい背広に身を包んだ瘦身の男性がいた。

われわれ新生はだれしも号令をかけ威張っている若い教官が講師で、日陰の石垣の人物が助教授だろうと思い込んでいた。助教授は偉いものだ、どうせなるなら助教授だと想わさしめたものだった。ところが、その直後のフランス語の授業にもくだんの紳士が出席していたこともあって、いったい彼はだれだとなった。もちろん、これは後で知ったことだが、この細身の紳士が長い療養生活のあと、33歳かで上智に入学された長戸路信行氏であった。

その頃の上智は3月下旬まで学生募集をしており、もう予備校通いはいやだとか、もう浪人生活は赦さないという親の怒りを恐れた学生が多く集まってきたから、お互いさほど年齢差は気にはならなかったが、それでも長戸路氏だけは別格でそれ相応の年輪を窺わせる風貌や雰囲気、それと品があった。しかし、いざ話してみるとどこまでも若く、軽妙洒脱で話術に長け、この上ない教養に溢れていた上に、仲間のひとりが評したように「年輪をうかがわせる常識と天才をのぞかせる非常識」をも持ち合わせて

いたから、彼の住む千駄ヶ谷の下宿はたまり場となり、夜な夜な繰り出す四谷、代々木、新宿、有楽町、銀座への拠点となっていた。

とりわけ試験の直前ともなるとこの長戸路塾には大勢が集まり、ここで作られた模範答案が全員に行き渡り、フランス語科の答案は正解ではあるがどれも論旨はみな同じと教授たちを嘆かせることにもなった。なんでも氏の上智時代の全科目は90点以上だったらしいが、勉強している姿などついぞみたこともなかったから、生まれながらの天賦の才があったのだろう。

当時、年に2回フランス語劇を上演し、評判がよければフランス人の幼稚園や公会堂に呼ばれたりしたものであったが、ある時モリエールの大作「町人貴族」を長戸路氏の演出で打ちだした。3時間にも及んだこの語劇はフランス大使らの前で演じられ大変な反響を呼んだものだが、翌日フランス大使館に呼びだされ「すばらしい芝居をありがとう」お礼だといって数十巻ものガリマール文学叢書を贈呈され受け取ってきたのもなつかしい。

実は、氏が亡くなる少し前に、古い卒業生も暇になったろうから、井上ひさし氏演出、監督が俺で50名位集めてもう一度「町人貴族」を今年中に上演しようと話し合い、実際になん人かに話しかけていた矢先の氏の急逝であった。